愛知工業大学研究報告
第20号A　昭和60年

“Self-help” にみられる『ジェントルマン』概念

—19世紀『ジェントルマン』概念研究の手がかりとして—

山　田　岳　志

Remarks on the Concept of “Gentleman” in The Self-help

For a study of the concept of “Gentleman” in Nineteenth Century England

Takeshi YAMADA

The aim of this study is an attempt to make clear the development process of the concept of “gentleman” in relation to its social structure in nineteenth century. It had been said that the so called sportsman and fairplay in modern sport was influenced and was formed by the middle classes, and made the remarkable development. Namely, England was the first country to industrialize and the development of modern sport-formation be seemed to just a reflect of this economic change, however, this answer based on such rude ecomonic determinism is unsatisfactory. And the important thing is change in the gentlemanly behaviour which occured in that connection. From this point of view, the concept of “gentleman” in nineteenth century will be discusssed in this paper, mainly concerning the concept of “gentleman” treated in the Self-help of Samuel Smile.

問題意識と研究の視点——序にかえて——

イギリス近代スポーツの思想的発展に関する従来の通説は，産業革命の成功とともに発展した中産階級の社会的発展の過程として彼らの社会的，政治的支配の増大と同一視する傾向で述べられてきたように思われる[1]。しかしながら，イギリス研究史が教示してくれるように，イギリス近代スポーツが思想的にも「近代化」の条件を整えたと思われる19世紀イギリス社会は，もう一方では伝統的ジェントルマン階級の価値意識が最も発揮された時代でもあったと言われている[2]。その例証として数々の史料を収集しうるのであるが，フランス人文学者，イポリット・テーヌは『イングランドの覚え書』で19世紀イギリス社会を観察してこう述べるのである。

> I have been trying to get a real understanding of that most essential word ‘a gentleman’; it is constantly occuring and it expresses a whole complex of particularly English ideas. The vital question concerning a man always takes this form: “Is he a gentleman?”[3]

さて，19世紀イギリス社会が中産階級にとってジェントルマン化意識が最も強調された時代であると言うのであれば，19世紀社会において「近代化」の条件を整えたと言われるイギリス近代スポーツの思想的把握を追究する試みはブルジュア的価値体系と伝統的ジェントルマン的価値体系との弁証法的発展過程においてこそとらえられる試みでなければならないように思われる[4]。R. W. Malcolmson が『英国社会における娯楽』の中で指摘するように[5]，いわゆる「近代化」以前のイギリスにおける身体活動が，日常的な思考・行動の様式を転倒させた上に成り立つのをその特徴とするものであれば，このような身体活動がイギリスにおいて近代スポーツとして認知される条件こそは，まさにブルジュア的価値体系に合致した価値観に適合すべく修正，発展の過程でこそあったように思われる[6]。しかしながら一方において，T. アーノルド，T. ヒューズ，C. キングズレー等が主張したクリスチャン・ジェントルマンの理念によって支えられた身体活動は，まさしく19世紀以降強調された伝統的ジェントルマン的価値体系の中においてでこそあったろうと思

われる[7]。このように19世紀イギリス社会を中産階級の発展過程としてとらえる一方，かの『帝国主義』を支えかつ『世界の工場』としての繁栄を確保していく過程は，また伝統的ジェントルマン教育を基調とした教育制度によってつくり出された人格形成と歩調を合わせるものであったろうと思われる[8]。まさに中産階級内において成長するジェントルマン化のエートスを体制内化することで展開されたそこでの教育内容はイギリス社会の思考・行動様式を支配するものであったと思われる。この社会的，文化的規準をともなった伝統的ジェントルマン的価値体系が20世紀初期まで続いたことを，J. H. Laskiの『ジェントルマンであることの危機』において読みとることができると思われる[9]。さて，イギリスのスポーツがまさに「近代化」される過程は，19世紀イギリス社会が創り出した社会的条件が反映される過程として追究される試みでなければならないと思われる。このことはパブリック・スクールにおけるスポーツ教育の成立が，イギリス近代スポーツの思想的発展過程としてとらえられるにしても，そこにみられるsportsmanship，このスポーツに対する理念は，いわゆるFairplay，Leadership，忠誠心，規律，統率性，又あえて挙げるとするならば，self-sacrifice，selfdenialといったこれらの特性の総体こそは，19世紀から20世紀初期にかけて，イギリス的人格形成に対して少なからず影響を与えたように思われるのであり，それはまた当時のイギリス文化を支配した伝統的ジェントルマンの理念に通じるものであったと思われる。さて拙者はこのような立場からイギリス近代スポーツの思想的研究の手がかりとして，これまで伝統的ジェントルマン概念の追究を試みてきた[10]。そしてさらに今回は19世紀ジェントルマン概念を追究する試みとして，Samuel Smilesの思想を手がかりとして若干の検討を試みるものであるが，それはイギリス資本主義の発展にともなって変化したと思われるジェントルマン概念の問題を設定するための大雑把な予備的試みである。史料としては，Samuel Smilesの“Self-help”（1883年）を中心として“Character”（1871年），“Duty”（1880年），“Thrift”（1875年），“Life and Labour”（1887年）は今回は補助的史料として使用した。（なお，上記の史料は国立国会図書館所蔵のものを利用した。）

〈Self-help〉におけるジェントルマン像

トーマス・エリオットによって，いわゆるジェントルマン概念が普遍的文化概念としてイギリス社会を支配して以来，それはイギリス人にとって思考・行動様式を決定するためのステイタスシンボルでもあったろうと思われる。しかしながら，産業革命を経て成長する中産階級の社会的発展はジェントルマン階級の秩序の動揺ばかりか，それにともなって生じる新たなるジェントルマン像の模索が展開されたように思われる[11]。しかし，そこにおいても中産階級の社会的発展が伝統的ジェントルマン的社会体制へのアプローチではあっても，彼らの価値体系に沿ったジェントルマン像の模索，追求ではなかったように思われる[12]。その例証として，エンゲルスとイポリット・テーヌは次のように言及するのである。「イギリスでは，ブルジュアジーが支配独占し切ったことはいちどもなかった。1832年に勝利を得た時でも，政府の要職は土地貴族がにぎっていた。富裕な中流階級がなぜこれを黙っているのか，その点わたくしには合点がいかなかった。——実際，当時のイギリスの中流階級は概してまったく無教育な成り上りものであったので，島国人特有のうぬぼれに，多少商人的ウィットに味をつけたくらいでは間にあわないような政府の枢要の地位となると，これを貴族にゆだねねばならなかったのである。」[13]，そしてイギリスでも偉大な工業家の一人であった一急進主義者が語ったところによるとこうである。

> It is not our aim to overthrow the aristocracy: we are ready to leave the government and high offices in their hand. For we believe, we men of the middle class, that the conduct of national business calls for special men, men born and bred to the work for generations, and who enjoy an independent and commanding situation.[14]

さて，このような19世紀イギリス社会において，Samuel Smilesの説くジェントルマン像とはどのようなものであったろうか。まず彼の思想の中核でもあったと思われるものに注目するとこうである。

> The highest object of life we take to be, to form a manly character, and to work out the best development possible, of body and spirit——of mind, conscience, heart, and soul. This is the end: all else ought to be regarded but as the means. Accordingly, that is not the most successful life in which a man gets the most pleasure, the most money, the most power or place, honour or fame; but that in which a man gets the most manhood, and performs the greatest amount of useful work and of human duty. Money is power after its sort, it is true; but intelligence, public spirit and moral virtue, are power too, and far nobler ones.[15]

この引用文においてSamuel Smilesの思想の中核，つまり彼の理想が何であったかが推察されよう。Samuel Smilesはこう言うのである。人生の目的は富裕になりそ

れによって地位，名誉といったきわみを尽すことではない。人生の目的はもっと道徳的なものでなくてはならない。また Samuel Smiles は別のところでこう言うのである。少々長い引用になるが，しかし Samuel Smiles の思想を把握する上できわめて重要と思われることからいとわず引用するとこうである。

> Although money ough by no means to be regarded as a chief end of man's life, neither is it a trifling matter, to be held in philosophic contempt, representing as it does to so large an extent, the means of physical comfort and social well-being. Indeed, some of the finest qualities of human nature are intimately related to the right use of money; such as generosity, honesty, justice, and self-sacrifice; as well as the practical virtues of economy and providence.[16]

Samuel Smiles はこう言うのである。人生にとって確かに経済的自立だけが目的ではない。しかし全く無関心というわけにはいかない。なぜなら，人間としての品位という——寛大，正直，正義，自己犠牲といった諸徳を身につけるためにも経済的自立はきわめて必要なことである。このように "Self-help" において説く Samuel Smiles の勤勉，節約，節制こそは彼の基本的思想をなすものではあったにしても，Samuel Smiles の思想が単なる経済的自己の確立だけを目指したものでなく，むしろ人生最大の目的がそれを下部構造とした，すぐれて道徳的な人格形成を目指したものと思われる。

> Everyman is bound to aim at the possession of a good character as one of the highest object of life.[17]

このように説く Samuel Smiles の目的こそはまさにジェントルマンであったろうと思われる。では彼のいうジェントルマン像とは具体的にどのようなものであったろうか。

> Riches and rank have no necessary connexion with genuine gentlemanly qualities. The poor man may be a true gentleman.[18]

> The true gentleman is of no rank or class. He may be a peasants or a noble. Every man be gentle, civil, tolerant, and forbearant. ——Riches and rank have no necessary connexion with gentlemanly qualities. The humblest man may be a gentleman, in word in spirit——The poor man with a rich spirit is in all way superior to the rich man with a poor spirit.[19]

この二つの引用文からみると Samuel Smiles がジェントルマンの資質として，家柄とか地位といったものを条件としていないことである。伝統的ジェントルマンとは地位，家柄がまずその資質としてあげられるものであったが，彼のそれは超階級的なものであったように思われる。次に Samuel Smiles が描写するジェントルマンとしての条件をあげてみるとこうである。ここでは彼のいうジェントルマンの条件が総括的に述べられている "Life and Labour" からの引用を試みる。

> What is it to be a gentleman? Thackeray says: It is to be honest, to be gentle, to be generous, to be brave, to be wise, and possessing all these qualities, to exercise them in the most, graceful outward manner. St. Palay names twelve virtues which are the necessary companions to the true knight: Faith, charity, justice, good sense, prudence, temperance, firmness, truth, liberality, diligence, hope, and valour. To these might be added tolerance and consideration for the feeling and opinions of others.[20]

さて，Samuel Smiles がジェントルマン像の理想的資質としてとりあげる諸徳性はきわめて伝統的ジェントルマンのそれと同等のものであったように思われる。このことは Samuel Smiles が一方で描写したジェントルマン像とも合わせて考えた場合，彼のジェントルマン像に両義的側面があったように思われる。しかしながら，"Self-help" にみられる Samuel Smiles のジェントルマン像とは次のようなことではなかったろうか。

> He may be honest, truthful, upright, polite, temperate, courageous, self-respecting, and self-helping, ——that is, be a true gentleman.[21]

さて，Samuel Smiles が理想とするジェントルマンの諸徳性をとりあげてきたが，ここでは彼のいうジェントルマン像の特質的なもの，つまり Samuel Smiles がいかに時代的精神に合致するかのようなジェントルマン像を描写していたかを推察してみる。伝統的ジェントルマンの特質として，トーマス・エリオット以来その普遍的文化理念として特徴的であったことにルネサンス的人文主義による教養があげられるであろう。このルネサンス的人文主義教養に対して Samuel Smiles はこう言うのである。

> It is possible that at this day we may even exaggerate the importance of literary culture. We are apt to imagine that because we possess many libraries, institutes, and museums, We are making great progress. But such facilities may as

often be a hindrance as a help to individual self-culture of the highest kind.[22]

School, academies, and college, give but the merest beginnings of culture in comparison with it. Far more influential is the life-education daily given our homes, in the streets, behind countries, in workships, at the loom and the plough, in countinghouse and manufactories, and in the busy haunts of men.[23]

ここにおいてSamuel Smilesのいう"culture"が何を意味するものであるか，それはまさしく「ギリシヤ主義」による人文主義を示しているのであり，Samuel Smilesは伝統的ジェントルマンの資質であった教養を否定しつつ，それに対応するものとして"self-culture"なるものをジェントルマンの資質として加えたのである。それではSamuel Smilesの"self-culture"なるものが一体何であったのか——，彼の諸作品においてこの"self-culture"はいたるところに散在するのであるが，簡潔的に言うならばそれは『学問』に対して『生きた知識』ということであったろう。このようなSamuel Smilesの「ギリシヤ主義」的教養に対する態度，つまり人文主義的教養に対してこう言うのである。

It is intellectual cynicism and scepticism, with a varnish of refinement.[24]

このようにSamuel Smilesは「ギリシヤ主義」的な人文主義をジェントルマンとしての資質から除外する時，それに対応するものとしてキリスト教をとりあげるのである。

Christianity, accordings to Guizot, is the greatest school of respect that the world has over seen. Religious instruction alone imparts the spirit of self-sacrifice, great virtues, and lofty thoughts.[25]

Samuel Smilesにとってこのキリスト教は彼のジェントルマン像の根本思想であったように思われる。それは決して「ギリシヤ主義」的なものではなく，ヘブライ主義的なものであったように思われる。この意味においてSamuel Smilesの思想も，かのM・アーノルドが指摘するような中産階級が求めた時代的精神に合するものであったように思われる。さて，Samuel Smilesのジェントルマン像で特徴的なことは，self-cultureをはじめとしてself-sacrifice，self-denialといったものが強調されていることであろう。

Lord Chathan has said that the gentleman is characterised by his sacrifice of self and preference of others to himself in the little daily occurrances of life.[26]

Some of the finest qualities of human nature are intinately related to the right use of money : such as generosity, honesty, justice, and self-sacrifice ; as well as the practical virtue of economy and providence. On the other hand, there are their counterpart of avarice, fraud, injustice, and selfishness.[27]

このようにSamuel Smilesはジェントルマンの資質として"self-sacrifice"を説くのであるが，それはキリスト教による"self-sacrifice"の精神こそは男らしい人格形成の根底をなすものであったと思われる[28]。そしてこの男らしい人格形成こそは，Samuel Smilesが言うジェントルマン像にとっても人生最高の目的である諸徳性を形成する上で重要なものであったと思われる。このようにSamuel Smilesのジェントルマン像の理想とは"Life and Labour"の中で総括しているようにきわめて道徳的でかつ宗教的性格を持ち合わせたものであったように思われる[29]。さて，Samuel Smilesが説くジェントルマン像が地位，家柄，生まれといったものとは異なる超階級的なものであり，かつ勤勉，節約，節制といった生産的倫理とも言える立場にあり，また「ギリシヤ主義」的な人文主義に対してはヘブライ主義的立場を強調するといった，いわば伝統的ジェントルマン的価値観とは対象的なものであったように思われる。しかしながら，Samuel Smilesのジェントルマン像をしてこう言えないだろうか。つまり19世紀イギリス社会が中産階級によるジェントルマン化のエートスと昇華されていた時代にあって，Samuel Smilesのジェントルマン像がその対象を超階級的なものとしてとらえるならば，Samuel Smilesの説くジェントルマン像も19世紀の社会体制を肯定した上に成り立つものであり，それは誰でもジェントルマン的志向が保証されていたということの裏付けではなかったろうか。

暫定的結語

19世紀のジェントルマン概念を，Samuel Smilesの"Self-help"を中心としてその大雑把な追究を試みてきた。さて，Samuel Smilesのジェントルマン像は，伝統的ジェントルマン像の諸資質にキリスト教（ヘブライ主義）による諸徳性を持ち合わせた，いわば二重構造的な側面を持ち合わせたものであったように思われる。しかし19世紀イギリス社会においても，「ギリシヤ主義」的といわれる伝統的ジェントルマン像はキリスト教の説く諸徳性と接合することで，かの「帝国主義」が必要とした

人格形成を準備する恰好になったと思われる。イギリス近代スポーツの思想的発展もこうした社会的条件を反映しながら展開されたと思われる。J. W. リーダーが「スポーツが『男らしさ』を育てたのも事実であった。これは中産階級が重んじた徳だった。」[30]と指摘する時，このスポーツの担い手がパブリック・スクールにあったことを思えば，まさしく中産階級的価値が伝統的ジェントルマンの価値と融合していたことの例証ではなかろうか。19世紀イギリス社会がJ. H. ニューマン的ジェントルマン像とSamuel Smiles的ジェントルマン像との融合したものと特徴づけられるものとするならば[31]，Samuel Smilesの説くジェントルマン像がたとえ間接的ではあったにしてもパブリック・スクールにおいても追求されたのではなかろうか。イギリス近代スポーツの思想的特質である"self-sacrifice", "self-denial"[32]こそはまさしくSamuel Smilesが言うジェントルマンに求められた資質でもあったのである。

引用・参考文献

1）例えば，中村敏雄，『現代スポーツ論序説』，p.68，大修館書店，1977．は〈近代スポーツ〉の特質を資本主義社会に導びかれる合理的精神にあると指摘し，また加藤元和，『近代体育の歴史とその思想』，p.61，タイムス社，昭和48年．はイギリス的スポーツの発展・展開は近代資本主義経済によってもたらされる生産様式によって規定されると指摘する。
Kenneth Sheard, Eric Dunning. "Barbarians, Gentlemen and Players", p.67～69. Martin Robertson, 1979.

2）このような見解をとるものに，村岡健次，『ヴィクトリア時代の政治と社会』，p.13，ミネルヴァ書房，昭和56年．がある。本研究にとっても大いに示唆され，かつ教示を受けたことをここに特記しておきたい。
青山吉信，他編，『イギリス史研究入門』，山川出版，1973.

3）Taines Notes on England, trans, by E. Hyams, 1957, p.144. 又，アダム・スミスは「商人たちは，ふつういなかの郷紳になろうという野心をもっているものであって，またそうなると，かれらは一般にすべての改良家のなかでも最良のものになる。」，大内兵衛，松川七郎訳，『諸国民の富』，p.475，岩波文庫(二)，昭和40年．

4）B. クリック，『ジョージ・オーウェル，上』，にその例証をみるとこうである。「学業の席次と試合の得点とが，同等の重要性をもっているかのようにごっちゃに混り合っていることに注目しよう。集団精神（チーム・スピリット）と個人間の競争心のこの奇怪な綜合ぶりは，この種の予備校に典型的な資本主義的倫理と貴族的倫理との混合を象徴していると言ってよかろう。」，河合秀和訳，p.64，岩波書店，1983. 又，村岡健次，『ヴィクトリア時代の政治と社会』においてもこのような見解が述べられている。

5）R. W. Malcolmson, "Popular Recreation in English society, 1700-1850", p.56, Cambridge Univ. Press, 1973.
中村賢次郎編，『都市の社会史』，p.297，ミネルヴァ書房，1983.

6）イギリス近代スポーツの成立過程について，阿部生雄は次のように指摘している。「18世紀から19世紀前葉にかけてのゲーム・スポーツの動向は，産業社会の中で擡頭していく中産階級が彼らの独自のゲーム・スポーツを形成していく過程であった。」，『スポーツ教育』，p.51～52，大修館書店，1977.

7）T. W. Bamford, "Thomas Arnold on Education" p.30. Cambridge Univ. Press. 1970.又，T. アーノルドのクリスチャン・ジェントルマンの概念は，伝統的ジェントルマンの価値体系をキリスト教と結合させることで，中産階級の子弟を体制内化した。つまり，伝統的ジェントルマンの教育の枠内に組みこむかたちでジェントルマン化意識がエートス化した中産階級を満足させたと思われる。M. アーノルドはこう指摘している。「たしかに，ギリシヤ人が自由を追求し，体操を追求したのは，機械的でなく，十全な人間的完全と幸福とのある理想を絶えず参酌してであったからである。――人類は本能的に，事物はこの理想との関連において追求されるときにだけ貴重である，と感じる。それゆえ，われわれは，われわれのあいだにおける最も堅実な階級の思想と行動とがおこそうとしている混乱によって警告を与えられるのと同じように，ここでもふたたびわれわれは警告をうけているようである，われわれはあまりにももっぱらわれわれのヘブライ主義的本能，思考の精緻，柔軟性よりも行為の真剣さをえらぶことを助長し，それがために本能的な実りのないもんきり型におちいったのである，と。そしてもう一度われわれは教えられているようである。明白な事理を熱烈に探求してわれわれのおきまりの観念を習慣とのまわりに新鮮な思想の流れを自由に流通させるわれわれのギリシヤ主義的本能の発達が，現在われわれによって最も多く要求されているものである，と。」，多田英次訳，『教養と無秩序』，p.202～203，岩波文庫，1984.

8）ジョージ・オーウェルは『ビルマの日々』においてこう述べている。「――そのあと三流のつまらないパブリック・スクールに進学した。貧弱でデタラメな学校だった。英国教会高教会派や，クリケット，ラテン詩の伝統をもつ一流パブリック・スクールをまねていた。――しかし，ここには一流校の特質である文科的教養の雰囲気がなかった。」，宮本靖介，土井一宏訳，p.82，晶文社，1984.

9）ラスキをはじめとして，20世紀に入ると，「ジェントルマン」的価値体系に対する批判的態度が文学等を中心に展開されたように思われる。例えば，オーウェル，D. H. ロレンス，もそのような立場であったと言われる。
H. J. Laski, "The Danger of Being a Gentleman" 1923.

10）拙稿，「『ジェントルマン』概念過程における身体運動の史的研究」，愛知工業大学"研究報告"，No.17, 1982. No.18, 1983. No.19, 1984.

11）『ヴィクトリア時代の政治と社会』，p.212.

12）Ibid, p.131.

13）エンゲルス，大内兵衛訳，『空想より科学へ』，p.123，岩波文庫，1982. ここにおける「1823年の勝利」とは第一次選挙法改正を示すものと思われる。又，これは1846年の穀物法とともにイギリスにおいて中産階級が社会的勢力を増大させる契機ともなったと言われている。

14）"Taines Notes on England", trans, by, E. Hyans, p.155, 1957.

15）Samuel Smiles, "Self-help", p.312, London, 1883.

16）Ibid, p.290.

17）Ibid, p.386.

18）Ibid, p.293～294.

19）Samuel Smiles, "Life and Labour", p.28～29.

20）Ibid, p.28.

21）"Self-help", p.399～400.

22）Ibid, p.326～327.

23）Ibid, p.6.

24）Samuel Smiles, "Duty", p.46～47.

25）Ibid, p.37.

26）"Self-help", p.407.

27）Ibid, p.290.

28）『ヴィクトリア時代の政治と社会』，p.198～200.

29）"Life and Labour", p.36.

30）W. J. リーダー，小林司，山田博久訳，『英国生活物語』，p.196，晶文社，1983.

31）村岡健次，『イギリス自由主義の発達』，p.24，岩波書店，1971，世界歴史19.

32）"Self-denial", "self-sacrifice" はチーム・スピリットを支えるものであったと思われる。

その他.

- 川本静子，『イギリス教養小説の系譜』，研究社，1973.
- 越智武臣，『近代英国の起源』，ミネルヴァ書房，昭和51年.
- 川北　稔，『工業化の歴史的前提』，岩波書店，1983.
- 柴田三千雄，松浦高嶺編，『近代イギリス史の再検討』，御茶の水書房，1972.
- ルイ・カザミアン，石田憲次，臼田昭訳，『イギリスの社会小説1830-1850』，研究社，昭和33年.
- Robin, Gilmour, "The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel", London, 1981.
- Horold, Perkin, "The origins of modern English society, 1780-1880", Routledge & Kegan Paul, 1969.
- Edward, C. Mack, "Public Schools and British Opinion since 1860", Greenwood Press, 1971.

（受理　昭和60年1月30日）